

# 子どももの命は預けられない

文／佐藤幸子

## 子どもだましの「安心」

2011年3月20日、いわき市から始まった山下俊一氏の「1000ミリ安全キャンペーン」では、放射能を配することによるストレスが健康を害するという講演が各地で開催されました。私はその話を聞いて、これから国や県が行おうとしているだろうことが頭をよぎりました。3月の高線量の時に県外に避難されては、被曝のデータ数が減ってしまうのです。福島県民を県内にとどめておき、データを取るためのモルモットにするつもりだ、と直感で思いました。

その頃、福島県内はガソリン不足が続き、避難するにも車でどこまで行けるかわからない状態でした。また、高速度道路は封鎖され、一般車両は通れませんでした。本当に福島県にガソリンが運ばなかったのか、高速度道路を封鎖した本当の理由は何なのかと疑問がわきました。ガソリンは、「4月1日から通常通り販売できる」と聞いていま

したが、それも不思議に思っていました。

スピーディの情報は当時、隠蔽されていた。しかし、山下氏は知っていたのではないかと私は疑ってしまいます。3月19日、福島県放射線健康リスク管理アドバイザーに就任した山下氏と、同じく長崎大学医学部教授の高村昇氏は、20日いわき市、21日福島市、22日川俣町で講演しました。すでに避難している福島県民は、誤った知識で過敏に反応していると述べ、そうした「理科音痴」の福島県民に正しい知識を教えるために、長崎大学から来たと述べましたが、もう開いた口がふさがりません。

ヨウ素は、原発から南下していわき市を直撃しています。山下氏によると、「1000マイクロシーベルト/時を超えなければ健康への被害はない、皆さんマスク止めましょう」と言い切っています。空間線量はさほど高くないいわき市ですが、ヨウ素での内部被曝被害はいわき市がとても心配です。

北西の風の風下、飯館村、川俣町、

福島市の線量が高いことも知っていたはず。線量の高い順番に講演会を開催していったのではないかと思いましたが、これは当然、何の証拠もありません。私の想像です。

山下氏の言うように「理科音痴」の福島県民ですから、大学の偉い先生が話していることは間違いないとすつかり信用してしまうのは当然です。県庁に「なぜ山下氏がアドバイザーに就任したのか」と聞いたときに、「長崎大の放射線の専門家で、チェルノブイリにも何回も行って研究された権威のある先生だから」と回答がありました。当然、福島県も各市町村も全て山下氏らの話を元にその後の対策を講じました。

その後、山下氏の講演内容は、回を重ねるごとに少しずつ変わっていき、ついに5月3日、二本松市での講演で馬脚を現しました。「私は、安全だとは言っています。安心してください」と言っているのです。日本語は難しいです。私は「安全」でないものが「安心」とは理解できません。福島県民が「安心」するなら、山下氏は自分の孫を連れて砂場で遊ばせるのはたやすいと発言しています。しかし、未だに連れてきません。教育者ともあろう大学教授が嘘をついてはいけません。放射能のことは、間違ったことを教えなくてもそれは後で訂正ができます。まだ研究段階でしたからと言いついででき

す。しかし、すぐできることを約束したのに守らないのは、教育者として失格です。福島県民を安心させるためには、家族全員で福島県に住み、自らがその証明をするべきです。

## 他人事にされる子どもの被曝

私が山下氏の講演を直接聞いたのは、5月5日の喜多方市でした。二本松での講演がそれまでと雰囲気は違っていたことを認識していたのかどうかはわかりませんが、質問者には、いかにも動員されたような3人があらかじめ質問内容を書いてある紙を持っていて、打ち合わせをしていました。私はその3人の前の席にいました。

講演は、当然「1000ミリ安全」を強調するものでした。しかし、1000ミリシーベルトのあとの単位を言いません。1回なのか、年間なのか、一生なのかを。このことは、その後、福島市政だよりで確認しても載っていませんでしたから、担当者に確認したところ、解らないと答えが返ってきました。講演を聞いた人が勝手に年間と勘違いするのを狙っているかのようなと思いました。

「5人の子どもを持つ母親です。文科省に20ミリシーベルト撤回を求めて直接交渉にも行っています。本当に子どもたちは大丈夫なのでしょうか？」と私は質問しました。山下氏の答えは